



JAXA 東京事務所にて

JAXA (宇宙航空研究開発機構)

中村有佐さん

会計×宇宙＝自分にしかできない仕事

日本での宇宙開発の中心となる JAXA。理系の研究者が多く活躍する中、中村有佐さんは大学で学んだ会計の知識を活かしながら宇宙・航空の研究開発をサポートする役割を担う。「自分の専門分野と宇宙を掛け合わせ、自分にしかできないことをやれる」と仕事の魅力を語る。

心に刻まれた言葉があるという。入職3年目、中村有佐さんが人工衛星開発を担う部門で、国との予算折衝に従事していたときだ。

ある省庁の担当者に、前例に倣って作成した予算案を説明すると、こう返された。

「過去なんて知ったこっちゃない、君はどう考えているんだ」

その言葉にどきりとした。どれだけ深く自分は考え

られていたのだろうか。自分の考えとして落とし込めていなければ、その言葉に説得力はないと痛感した。

これまでロケットエンジン開発におけるメーカーとの契約、人事部門で研修業務など様々な業務を経験してきた。入職から8年目の現在、かつて所属していた部門で、再び予算折衝に関わる業務に携わっている。

あの言葉を教訓に、学生時代に学んだ会計の知識

なかむら ありさ

1994年6月23日、神奈川県厚木市生まれ。2017年、専修大学商学部会計学科卒業後、JAXA 入職。資材調達、広報、契約、資金管理、人材育成などの業務を担当。2022年に功績が認められ、理事長賞・部門長賞を受賞。趣味は旅行やアニメ鑑賞など。



↑大学4年次、ハロウィンに友達と仮装。右が中村さん



↑卒業式にて祖父母と共に

を活かし職務に当たっている。

会計の勉強をきっかけに、JAXAへ

会計の勉強に興味があり、専修大学商学部会計学科に入学。エクステンションセンターの会計士講座も受講しながら会計資格の取得を目指した。2年次から奨励生に選ばれ、会計専門学校とのダブルスクールで学んだ。

大学2年次の11月に日商簿記1級に合格。そして、その先の進路に迷う。さらに勉強を続けて公認会計士を目指すか、それ以外の道を目指すか。

ちょうどその頃、会計専門学校卒業生の就職先リストを目にし、驚きを覚えたという。

「理系の分野と思っていたJAXAに会計の専門学校から入った人がいました。そこでスイッチが切り替わりました」

子供の頃から宇宙には興味があった。「JAXAに入りたい」と思った。

「悩むくらいなら即行動。そして思いは口にするタイプ」だという。JAXAへの思いはあちこちで話した。すると、自然と協力してくれる人が現れた。

ゼミの菱山淳教授から元JAXA研究員の大月祥子准教授のことを教えてもらい、その授業を履修した(38頁に関連記事)。さらに大月先生の紹介でJAXAの相模原キャンパスに出入りし、学生広報スタッフとしてイベントの手伝いなども行った。そうした場での職員との交流を通し、JAXAで働くことのイメージは膨んでいった。

ゼミは財務会計による企業経営の分析がテーマだったが、その学びから発展しJAXAの財務諸表も調べてみた。すると一般企業とは違う、独立行政法人の会計基準が「面白かった」。

予算がどう使われ、どのような成果を生んでいるか。自分が学んだ会計の知識を活かせば、JAXAの功績を広く国民に伝えることができるのでは——その熱い思いを面接ではアピールした。

そして、内定を得た。

今に繋がった勉強の日々

世界では官民による宇宙開発が盛んだ。日本においても宇宙関連の国の予算規模は年々増加傾向にある。そうした中で、「中心メンバーとして活躍していくのが夢」と話す。そのためにも学生時代に一度は断念した、公認会計士試験の勉強を再開しようと考えている。

大学時代に会計の勉強に取り組んだ時間を振り返り、あの時間のお陰で今の仕事に繋がり、それを支えてくれたのが両親だったと話す。

「あの頃、朝7時半に水道橋にある会計の専門学校に行くために5時半に家を出ていました。まだバスが走り始める前で、毎朝父が車で30分かけて駅まで送ってくれ、帰りも夜11時半に駅に迎えに来てくれました。父は大好きなお酒も我慢して、2年間付き合ってくれた。母も朝晩のご飯をいつも用意してくれた。言葉で伝えてこなくても、すごく応援してくれていました。」

他の進路を選び、公認会計士の勉強をやめると話したとき、父は有佐のやりたいようにやったらいいよと。母はここまで頑張ったし有佐の人生だから好きにしたらいいよと言ってくれ、私の考えを尊重してくれました。

簿記の資格を活かして今楽しく仕事できているのも、あの時間のお陰で、それを応援してくれた両親への感謝は一生忘れません」